千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ12
三沢厚彦｜コネクションズ
空洞をうめる

会期
2023年
7月14日（金）－10月15日（日）

アーティスト
三沢厚彦

テーマ
コミュニケーションが
はじまる

概要
「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。
第12回は、彫刻家の三沢厚彦さんをお招きし、アーティストやキュレーターらとともにプロジェクトを展開しました。「空洞をうめる」というタイトルには、「埋める／生める」というふたつの意味が込められています。千葉の街から着想を得た空間は、ワークショップや公開制作などの活発なイベントを通して、絶え間なく変化していきました。

三沢厚彦

コネクションズ 空洞をうめる

つくりかけラボ12

Art Lab 12 Misawa Atsuhiko

The Connections: Filling the Void / Creating the Void

Chiba City Museum of Art

三沢厚彦
Misawa Atsuhiko

八木良太
Yagi Ryota

志村信裕
Shimura Nobuhiro

大山エンリコイサム
Oyama Enrico Isamu

中野仁詞
Nakano Hitoshi

つくりかけラボ

都市の「ブリコラージュ」――鳥の足跡に思いを馳せてみること

2023年7月から10月にかけて、子どもアトリエで行われた「つくりかけラボ」の第12回には、彫刻家の三沢厚彦氏を招聘した。三沢氏は、同時期に当館で開催され、2ヶ月ほど会期が重なる企画展の作家でもあり、千葉市美術館では初となる、企画展とつくりかけラボの同一作家による試みとなった[1]。主に美術作品を鑑賞する企画展と、参加・体験型のアーティストプロジェクトであるつくりかけラボは、目的も対象も異なるが、完成度の高い空間が両方で実現できたことは、これまで全国各地の美術館で多数の展覧会に参加し、現代アートの分野で常に第一線で活躍してきた、三沢氏の類まれな経験によるものだ。そして、長年にわたり彫刻と空間について思索し、建築物と作品の密接な関係付けを発展させてきた三沢氏の動物彫刻「ANIMALS」は、それぞれの展示場所を飛び出し、動物たちが「棲む」壮大な空間を、美術館全体で生み出していった。

＊作家による千葉中央公園の写真

「多次元（Multi-dimensions）」をタイトルに冠する企画展において、三沢氏は当館を設計した建築家の大谷幸夫が、住宅を作る際に中庭を重視したというその思想に、強い関心を示した。会期中には、「中庭部屋」と名付けられた企画展の一室に滞在し、作品の補修や新作の制作などを通じて来場者との対話を重ね、時と場所を共有していった。企画展と並行するつくりかけラボの構想段階において、三沢氏が私たちに提示した「空洞」というキーワードは、個展の開催準備にあたり、千葉市内で散見された都市の空洞化が、一つの起因となっている。そして、日本国内の都市に共通するこの問題が、大谷による「中庭」とつながることで、企画展とつくりかけラボもまた連動し、作家や来場者、さらには三沢氏に賛同し、参加したキュレーターや作家らが、千葉というこの地で空洞をどのように考え、関わっていくか、つまり「コネクト」していくかが主要なテーマとなっていった。

「埋める」と「生める」の二重の意味を持つ「空洞をうめる」をテーマとし、彫刻家／建築家的な2つの役割を担った三沢氏の展示計画に基づき、都市の徘徊を連想させる猫の彫刻ほか数点の作品に加え、市内を運行するモノレールや、ロバート・スミッソンのアース・ワーク《スパイラル・ジェッティ》などから着想を得た構造体「S字ジェッティ」が、会場内に造作された。樟の木端や粘土を素材に、参加者によるオープンワークショップで自由に形作られた多種多様な生物や植物、建物や乗り物たちが、所狭しとS字ジェッティに置かれていき、会期終了時にその総数は3,400点に及んだ。また、三沢氏や志村信裕氏、八木良太氏、大山エンリコイサム氏が公開制作によって設置した作品、そして中野仁詞氏の立案による荒澤守氏のパフォーマンスが、子どもアトリエの空間を満たしていった。

フライヤーの裏面に掲載されている、市内を三沢氏本人が撮影した写真の中に、ひときわ印象的な一枚がある。それは、地面に敷かれた石畳が広く欠損し、コンクリートで埋められた部分に、鳥の複数の足跡が残された写真だ＊。その場所は、JRと千葉都市モノレールの千葉駅や京成千葉駅と当館を結ぶ、千葉中央公園にそびえ立つカルロ・ラムースの屋外彫刻のすぐそばに、今もひっそりとある。間に合わせとも受け止められる、やや粗雑に取り繕われた地面＝都市と、そこに偶然に降り立った鳥＝自然の遭遇は、やがて本プロジェクトのコンセプトビジュアルとして、参加作家らに共有されていき、本プロジェクトに招聘された三沢氏の立ち位置とも重なる。さらに、それはまた三沢氏が近年に注力する複数の動物を一つの体に合わせ持つ空想上の生き物である「キメラ」と、私たちの生きる複雑な都市／社会との鏡像的な関係を感じさせるものだ。

当館に滞在中、三沢氏は時折「ブリコラージュ」という表現行為への関心を語っていた。ブリコラージュとは、文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースによる、その時々のあり合わせの道具や材料を用いて、過去のものを壊しながらでも維持をしていく創作を示している[2]。木や土を主な素材に動物表現を行うことで、生命に根源的に関わってきた三沢氏が、つくりかけラボにおいて私たちに伝え、示そうとしていたのは、そのようなブリコラージュという創造的行為が照らし出す現在の社会の姿と、進むべき未来に対する岐路そのものだったように思われる。自然の破壊が不可避な現代社会という悲壮的な現実にあって、鳥の足跡に仮託された生物の不在を起点に、想像力と造形活動を介してその空洞を充填していく本プロジェクトは、たとえひと時であっても、アートの力が自然／社会と同様に心と身体に傷を負い続けていく私たちを癒やし、未だない空洞としての未来に思いを馳せ、その創造への一歩を踏み出せることの価値に気付く場所となり得たはずである。

森啓輔（千葉市美術館学芸員）

註

1. 企画展「三沢厚彦 ANIMALS／Multi-dimensions」の会期は、2023年6月10日から9月10日の計84日間。来場者は28,102名。
2. 「ブリコラージュ」については、下記を参照した。なお、会場が常に変化を続け、作家の完全なコントロールが不可能な「つくりかけラボ」のプロジェクトにおいて、三沢氏は人やモノの交流、移動による様々な関係性の拡張を活発化し、そこから生じる偶然的な要素を会場内に積極的に取り入れることに終始意識を巡らしていた。このことは、作家による造形表現の特徴としての「アッサンブラージュ」、さらには企画展のテーマの一つとされた「シンクロニシティ」とも深い繋がりがあると推察される。なお、シンクロニシティとは、心理学者カール・グスタフ・ユングによる「非因果的な偶然の一致」を意味する概念である。
クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』（大橋保夫訳）、みすず書房、1976年

Open Workshop

オープン ワークショップ

「千葉の街の空洞を うめる○○をつくろう」

三沢さんの彫刻から生まれた樟の木端や粘土からイメージをふくらませ、千葉の街の「空洞をうめる」ものをつくるワークショップを開催しました。

会期中いつでも参加可能
参加者数：7,730人／作品数：約3,400個

Artist Workshops & Events

アーティストワークショップ・イベント

三沢さんによるワークショップをはじめ、アーティスト、キュレーター、俳優による公開制作やワークショップ、イベントを多数開催しました。

コネクションズ

三沢厚彦／大山エンリコイサム／志村信裕／中野仁詞／八木良太

彫刻家の三沢厚彦を中心に、表現方法の異なるアーティストが交差＝関係し合うことから、新たな表現を生み出していく。2022年に小田原三の丸ホール（神奈川）で開催された「コネクションズ―さまざまな交差展―」に参加した三沢、志村信裕、中野仁詞、八木良太に加え、大山エンリコイサムを招き、「空洞をうめる」をテーマに千葉市美術館でプロジェクトを展開。

1

8月1日（火）

アーティストによるイベント

「志村信裕 公開制作」

講師：志村信裕

2

8月11日（金・祝）-13日（日）

アーティストによるイベント

「八木良太 公開制作」

講師：八木良太

3

8月13日（日）

アーティストによるイベント

「八木良太《Vinyl》上演」

講師：八木良太
参加者数：43人

4

8月26日（土）

アーティストによるドラマリーディング

「空洞と男、そして虎　中島敦『山月記』より」

企画：中野仁詞／ゲスト：荒澤守／参加者数：37人

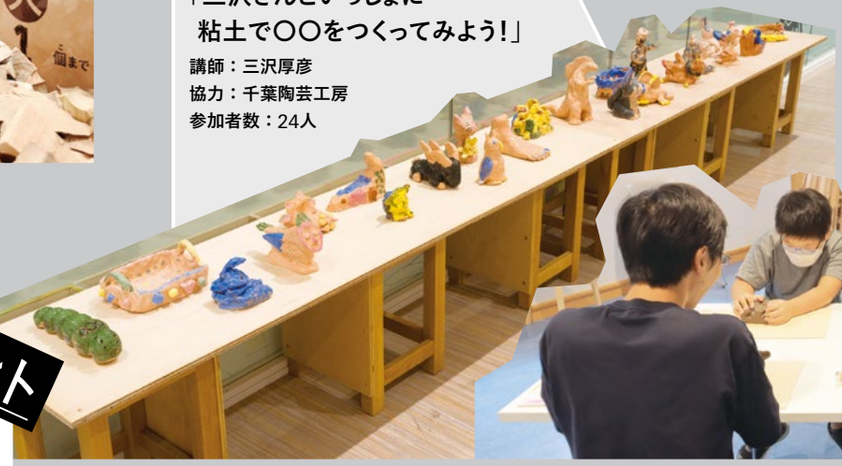
5

9月3日（日）

アーティストによるワークショップ

「三沢さんといっしょに 粘土で○○をつくってみよう！」

講師：三沢厚彦
協力：千葉陶芸工房
参加者数：24人



6

9月18日（月・祝）

アーティストによる ワークショップ

「影を集める」

講師：志村信裕
参加者数：11人

7

10月7日（土）

アーティストによるイベント

「大山エンリコイサム 公開制作」

講師：大山エンリコイサム

8

10月14日（土）

トークイベント

「街とアートをコネクトする」

登壇：三沢厚彦、志村信裕、中野仁詞、森啓輔、庄子真汀
参加者数：21人

「コネクションズ 空洞をうめる」を振り返って

2023年の「つくりかけラボ12　三沢厚彦|コネクションズ 空洞をうめる」。彫刻家の三沢厚彦さんの個展に導かれる形で開催されるこのコラボレーション企画を三沢さんからお声がけをいただき共に考え構成する好機を得た。この企画に先立ち、2022年1月から翌年の2月まで神奈川県西部に位置する小田原市に新しく開館した小田原三の丸ホールの「開館記念事業」として同名の「コネクションズ―さまざまな交差展―」を開催した。小田原は、三沢さんがアトリエを構える作家ゆかりの場所で、東海道五十三次の9番目の宿として街道沿いに位置し、古来より東西の文化が行き交う場である。小田原の歴史と文化は、過去から現代に重なり合うように存在することから、この要素をもとに三沢さんと筆者で現代美術の視点と表現でいかなる化合物を創造することができるかと考え実現した企画が「コネクションズ」であった。写真家の浅田政志、映像作家の志村信裕、インスタレーションを手がける作家の八木良太をセレクトし三沢さんと合わせ4人の作家が展示室で交差する展示となった。この「交差」という言い回しの一例として、三沢さんによる樟に彫られた熊の新作に、同じく樟の葉の間から漏れでる太陽光を撮影した志村信裕制作の映像を重ねた。さらに、八木良太は、彫刻の周辺に蝉の鳴き声の音を発するイヤホーンを天井から吊るし、彫刻、映像、音によりあたかも鑑賞者が自然の中にいるような状況を創り出した。

2

千葉市美術館4階に位置する、子どもアトリエ（約136㎡）を活用して展開した今回のつくりかけラボ「コネクションズ 空洞をうめる」。小田原でのコネクションズの参加作家、志村信裕、八木良太に三沢さんからの強い希望により大山エンリコイサムが加わり4人により構成された。志村、八木、大山の3人は、筆者が勤務する神奈川芸術文化財団（神奈川県民ホール（1,300㎡）／KAAT神奈川芸術劇場（400㎡））の空間で個展を開催した作家であり、広大な展示室で展覧会を行った経験を踏まえて、逆に小さな空間にいかに作品を展開できるかを期待した。

3

7月14日から始まったプロジェクトでまず三沢さんは空間全体を使いうねるような展示台を制作。大人から子供まで幅広い層の市民は、木の端材を組み合わせた個性的な作品を制作しこの展示台に置いてゆく。最終的にその数は3,400に及び、一つ一つは小さいながらも膨大な数の彫刻が関係しあい三沢さんが制作した舞台（展示台）の上で壮大な群像劇が繰り広げられたようだ。この空間に、志村信裕は青い水の中をゆったり漂うクラゲの映像、八木良太はリコーダーの空洞をシリコンでかたどりした立体ほかを、大山エンリコイサムはポリプロピレンを絵柄の形状にカットし既製品の椅子に絡ませた彫刻を、三沢さんとともに配置を考えながら展示した。

この空間に言語表現を展開しては、という筆者の提案を三沢さんは快く受け入れてくださった。「空洞をうめる」というお題と三沢さんの作品のうち度々取り上げられるモチーフ「虎」を考えた結果、中島敦の『山月記』を選んだ。遠い昔、日本から遠く離れた中国の山の中で、人間が虎に変身する出来事が時空における「空洞」と捉え、これをいかに言語表現をもって埋めるかを試みた。俳優荒澤守から、三沢さんへの質問を皮切りに李徴と袁傪という二人の男のダイアログをリーディング形式で上演した。

都市に存在する文化、経済の「空洞化」への三沢さんの問題意識から導かれたこの企画のテーマ。三沢さん、多くの市民、3人の若手作家そして俳優が参加した3か月に及ぶこのプロジェクトを振り返ってみると、何もない展示空間という空洞を、三沢さんがプロジェクトという形をもった彫刻作品として創造したのだと考える。

昨今、美術館、劇場、ホールと名付けられた建物とその一般的な役割の中で、美術、音楽、演劇、ダンス、日本の伝統などが領域横断的にソフトウエアを展開する時代となった。千葉市美術館でも、作家とキュレーターの企画により、多ジャンルとのコラボレーションを展開することで多くの市民にこれまでに感じたことのない刺激を与えることも期待している。

中野仁詞（キュレーター）

1

1　アーティストによるワークショップ「志村信裕 公開制作」「八木良太 公開制作」の成果展示
（左から）三沢厚彦《Cat 2022-01》2022年
志村信裕《玻璃の夢》2021年
八木良太《VOID-A》2023年
八木良太《VOID-B》2023年
八木良太《VOID-C》2023年
2　八木良太《VOID-B》2023年
3　アーティストによるワークショップ「影を集める」の成果展示
（上2点 左から）八木良太《Voice of Landscape (HK)》2023年
八木良太《Voice of Landscape (SZ)》2023年
4　大山エンリコイサム《FFIGURATI #590》2023年
5　アーティストによるドラマリーディング「空洞と男、そして虎　中島敦『山月記』より」の記録展示
（左から）三沢厚彦《Animal 2009-04B3》2009年
三沢厚彦《Cat 2010-05》2010年

4

5

「空洞をうめる」、その過程

つくりかけラボでは、作家が不在のあいだも、来場者が自由に参加できる「オープンワークショップ」をかならず行っている。これは、来場者のかかわりによってつねに空間が変化するつくりかけラボに欠かせない要素であると同時に、来場者にいっさいを委ねた不確定要素でもある。作家の手を離れた場所で、どのような作品が生まれ、どのように空間が変化するのか。プロジェクトの行く末すら左右しうるオープンワークショップは、自由で創造的な活動でありながら、予測不可能でスリリングな試みでもある。

結果として、今回のオープンワークショップ「千葉の街の空洞をうめる○○をつくろう」は、7,730人が参加し、約3,400点の作品が生まれ、文字どおり「空洞を埋める」こととなった。親しみやすい素材で、製作手順がわかりやすく、作品を残すことで直接的に空間にかかわることができる。また、会期が重なっていた企画展「三沢厚彦 ANIMALS／Multi-dimensions」に刺激を受けた参加者も多くいたようだ。作品を飾るための「S字ジェッティ」は、美術館側の想定を超え、みるみるうちに埋まっていった。しかし、これこそがオープンワークショップの予測不可能性であり、つくりかけラボの醍醐味でもある。日々変わっていく空間の、変化を促進するのか、制御するのか、あるいはさらに発展させるのか。三沢さんのつくりかけラボへのかかわり方は、そのいずれもであったように感じる。

満杯になった「S字ジェッティ」に対し、三沢さんは手ずから増築を繰り返し、最終的には滑車付きの「動くジェッティ」やテーブル型の「テーブルジェッティ」も登場した。場所や範囲を指定しつつも拡張するかたちで、来場者の作品は、さらに空間全体へと広がっていった。一方で、コネクションズの作品に対しては、あらかじめ展示用の造作物を設置したり、展示位置を想定したりなど、ある程度のコントロールがあった。くわえて、会期の後半に生まれたアーティストワークショップの成果物は、埋まりつつある空間の隙間を補うように展示された。ゆるやかな高低差を持った「S字ジェッティ」を基礎に、三沢さんによる過不足ないかかわりによって、つくりかけラボの空間が構築されていったのである。

閉幕後、残された作品をひとつひとつ確認しながら、三沢さんとともに撤収作業を行った。なんとあっけないことか、3ヶ月にわたって変化を遂げた空間は、1日足らずでほとんど空になった。がらんどうの会場を見て、三沢さんは「つくりかけラボこそが空洞だ」とおっしゃった。ゼロからプロジェクトを立ち上げ、予測できない変化を乗りこなし、そしてまた元の状態に戻す。この過程のすべてが、「空洞をうめる」ということだったのではないかと思う。

庄子真汀（千葉市美術館学芸員）

つくりかけラボ12
三沢厚彦｜コネクションズ　空洞をうめる

会期
2023年7月14日（金）–10月15日（日）

主催
千葉市美術館

協力
西村画廊
コネクションズ

会場施工
三沢厚彦
株式会社Office Toyofuku

グラフィックデザイン
LABORATORIES

作家滞在日
7月14日（金）、17日（月・祝）、18日（火）、20日（木）、21日（金）、24日（月）、26日（水）、27日（木）、29日（土）、30日（日）、31日（月）
8月1日（火）、2日（水）、5日（土）、6日（日）、8日（火）、10日（木）、11日（金・祝）、13日（日）、14日（月）、19日（土）、21日（月）、25日（金）、26日（土）、27日（日）、30日（水）
9月3日（日）、4日（月）、6日（水）、7日（木）、9日（土）、10日（日）、11日（月）、12日（火）、13日（水）、14日（木）
10月7日（土）、14日（土）

来場者数
14,966人
（大人12,096人、高校生以下2,870人）

「つくりかけラボ12
三沢厚彦｜コネクションズ　空洞をうめる」
報告書

執筆
中野仁詞
森啓輔
庄子真汀

撮影
岡野圭
三沢厚彦
山本未知
千葉市美術館

デザイン
加藤賢策（LABORATORIES）
鎌田紗栄（LABORATORIES）

印刷
吉原印刷株式会社

編集・発行
千葉市美術館

発行日
2024年3月25日

表｜三沢厚彦《Cat 2010-05》2010年 Photo by Oshima Takuya
三沢厚彦《Cat 2022-01》2022年 Photo by Misawa Atsuhiko
三沢厚彦《Animal 2009-04B3》2009年 Photo by Okano Kei
裏｜三沢厚彦《Animal-C Horned Owl》2023年 Photo by Okano Kei
すべて © Misawa Atsuhiko　Courtesy of Nishimura Gallery